

# 学習者の発見を促すことばの学習指導

— 類義語を取り扱った授業を中心に —

原 卓 志\*

(キーワード：類義語の意味記述，学習者による発見，モデル授業，事前指導)

## はじめに

本稿で取り上げる「国語学特論Ⅰ」は，普段何気なく話している（使っている）ことば（日本語）について，意識的に考える機会をもち，ことばに対する感覚（言語感覚）を磨くことを目的として，学部2年次生を対象として開設される専門科目である。シラバスには，次の三点を受講生の到達目標として掲げる。

- ①現代語・古典語の両面から，文法・語彙・表現についての知見を得る。
- ②日本語の分析方法の基礎を身につける。
- ③自らの言語感覚を磨くとともに，言語生活に対する興味と関心を高める。

これまでの授業では，「むすぶ」と「つなぐ」のような類義関係にある語を取り上げ，それぞれの語の意味について発表担当者が調査・分析した上で，各語の意味の違いが明確に理解できるような発表をする。その発表について発表担当者以外の受講生によって討議するという，いわゆる演習形式で進めてきた。受講後の感想によると，発表を担当し，ことばの意味的な違いをことばで説明することの難しさを身にしみて感じたようであるが，苦労した分，意味の違いを発見できたことの喜びや，分析の楽しさを感じる事ができたようである。また，意味分析のための基本的な方法を身につける事ができた。一つ一つのことばについて，それまでの無自覚的な使用から，自覚的な使用に変化してきたなどの感想もあり，シラバスに示す所期の目的はおおむね達成できたと考えられる。しかし，担当者の発表を聞く受講生に目を向けると，担当者の説明を聞いているだけの受動的な様子が目につき，発表後の討議が盛り上がることはめったになかった。ほとんどの場合，授業担当教員からの質問が討議の中心位置を占め，聞き手の意見や議論によって，ことばの意味記述がより良いものに改められることなどは皆無に近い状態であった。このように，「いかに聞き手としての受講生を議論に巻き込むか」「いかに教室全体で意味分析し，類義語の意味の違いを見出すか」「いかに受講

生（学習者）に発見を促すか」が，克服されるべき課題として残された。

上記のような課題を克服して，演習発表を発表者だけのものとせず，教室全体で考える時間にすることを企図して，平成28年度の授業では，担当者の発表形式を単なる発表ではなく，模擬授業風の発表へと変更した。教室全体で考えるような模擬授業を構想することは，学習者に発見を促す学習指導を構想する契機となると考えたのである。以下には，平成28年度授業実践のあらましを述べ，その成果と課題について報告する。

## 1. 授業計画

第1時には，授業のねらいを説明し，以下のような印刷物を配布して，各自が取り組む演習の内容，聞き手としての受講生の心構えを話した。

○国語学特論Ⅰ（2016年度）の演習内容

(1) 全体演習：「ぬすむ」「うばう」の意味の違いを考える。

(2) 個別演習（全15回予定）

内容：①言語直感と実例を基に，類義語の分析を行う。（例：「慣れる」「親しむ」）

②自分の分析結果をわかりやすく発表する。

《特に，留学生が聞いてわかるような説明》

形態：①選択したテーマごとに，一人の持ち時間45分（内10分の質疑）で行う。

②1回に二人ずつの発表を行う。

③一方的に発表するのではなく，議論することができるよう問題を提示し，みんなで考えを深めていけるような方法を工夫する。（→模擬授業的な発表）

ワークシートを配布して，みんなで考えを深める。

模擬授業風の発表の後，自分のまとめを発表（説明）する。…資料配付

約束：①発表に当たっては，必ず授業担当教員の事

\*鳴門教育大学 人文・社会系教育部

前指導を受けること。

事前指導の前に、自分なりに分析し、担当する類義語の意味の違いについての考えを持っていること。また、発表方法についても自分なりの案を持っていること。事前指導を受ける際には、前もってアポイントをとること。

- ②発表者以外の受講生は、しっかりと議論に参加し、積極的に発言（質問）すること。必ず、1 コマに1 回の質問・意見を述べること。

平成 28 年度で取り組むのは、形態③に示した「模擬授業的な発表」である。自分の分析結果を聞き手に伝えるだけではなく、聞き手とともに分析し、担当者の得た結論を、聞き手に発見させることを求めた。また、受講生に中国人留学生・タイ人留学生が含まれていたことから、留学生にも分かる説明であることを求めた。なお、この模擬授業は、自分と同じ大学生を対象としたものとした。小学校・中学校でも指導すべき言語事項として類義語が取り上げられていることから、対象を小学生あるいは中学生としても良いが、そうするためには、発達段階やそれまでの学習歴を考慮した授業計画が必要となる。学部 2 年次生に、そこまで求めるのは荷が重すぎると判断した。

授業は「全体演習」と「個別演習」の二つに分けた。

「全体演習」とは、授業担当者によるモデル授業である。今回は類義語「ぬすむ」「うばう」を取り上げて、分析の方法・発表（模擬授業）のモデルを見せ、発表担当者の行う「個別演習」の参考にさせた。

「個別演習」では、あらかじめ抽出した類義語のグループから受講生が二つずつ選択し、前半と後半の 2 回発表することとした。受講生の取り上げた類義語は以下の通りである。

第 1 回「むすぶ・つなぐ・くくる」「おもう・かんがえる」／第 2 回「たった・ほんの・わずかに」「さがす・さぐる・あさる」／第 3 回「こわす・わる・くたく」「とうとう・やっと・ようやく」／第 4 回「また・ふたたび・もういちど」「大事・大切・重要」／第 5 回「ほす・かわかす」「つるつる・すべすべ」／第 6 回「おこる・しかる・注意する」「きもい・きもちわるい」／第 7 回「ねだる・せがむ・せびる」「つかむ・にぎる」／第 8 回「さめざめ・めそめそ・しくしく」「じゃれる・ふざける・たわむれる」／第 9 回「やたらに・むやみに・みだりに」「さわる・ふれる」／第 10 回「さえぎる・さまたげる・おさえる」「さむい・つめたい・すずしい」／第 11 回「おおう・つつむ」「ひかる・かがやく」／第 12 回「もぐ・ちぎる」「つく・さす」／第 13 回「みる・みつめる・ながめる」「かど・すみ」／第 14 回「あたま・かしら・こ

うべ」「親分・ボス・親玉」／第 15 回「やかましい・うるさい」

## 2. モデル授業－「ぬすむ」と「うばう」－

類義語「ぬすむ」と「うばう」を考えるに当たって、ワークシート（「ぬすむ（盗む）」と「うばう（奪う）」の意味を考えるためのワークシート）を配付し、それに従って授業を進めた。配付したワークシートに記した課題は次のようなものである。

- (1) あなたは、「ぬすむ」と「うばう」の違いをどのように考えますか。…言語直感。
- (2) あなたが、「ぬすむ」／「うばう」としたら、どのような物を「ぬすみ」「うばい」ますか。「ぬすみたいもの」「うばいたいもの」リストを作ってみましょう。…データ収集。
- (3) 右のリストにあげた物は、本当に「ぬすめ」ますか？「うばえ」ますか？ それを確かめるためには、どうすれば良いでしょうか？…分類方法。
- (4) リストにあげたものを「ぬすめる／ぬすめない」「うばえる／うばえない」の観点から分類してみましょう。…分類。
- (5) 分類した結果から、「ぬすむ」「うばう」の意味を考えてみましょう。…分析。

### 2－1. 言語直感

(1)では、受講生の言語直感によって「ぬすむ」と「うばう」の違いを考えさせた。「ぬすむ」も「うばう」も、ごく普通に聞いたり、使ったりすることばであるから、すぐに次のような発言があった。

A：ぬすむ…人の見ていないところで、人の物をとること。

B：うばう…無理矢理、力づくで、人の物をとること。

教室全体に確認した上で、そのような意味の違いがあるという証拠を出すように促すと、受講生は「何を言っているのか？」という怪訝な顔をする。「ぬすむ」ということばの意味は「人の見ていないところで、人の物をとること」だと人を説得するためには、証拠が必要である。ことばの意味や働きを考える場合の証拠とは、「……」とは言える（自然である）が、「……」とは言えない（不自然である）という、例文をもって示すことを説明し、証拠となるような例文を考えさせた。

C：誰もいなくなってから、こっそり消しゴムをぬすんだ／<sup>?</sup>うばった。

D：いやがる相手の手から、無理矢理消しゴムを\*ぬすんだ／うばった。

C の文では、「ぬすむ」を使用するのが自然であるのに

対して、「うばう」を使用するのはやや不自然に感じられる。Dの文では、「ぬすむ」の使用が不自然であるのに対して、「うばう」の使用は自然である。このような例を証拠として、先のA・Bのような意味的な相違が明らかになることを確認した。

## 2-2. データ収集

言語直感によれば、A・Bのように、「人の見ていないところで、こっそり」行う行為であるか、「人の見ていところで、無理矢理、力づくで」行う行為であるかという違いが明らかになった。研究の次の段階は、「ぬすむ」「うばう」の意味の違いとして得られた結論A・Bに見落としがないかを検証しなければならない。そのために、受講生個人個人で(2)「ぬすみたいもの」「うばいたいもの」リストを作成する活動を行った。ここで「ぬすみたいもの」「うばいたいもの」としたのは、受講生の興味を引き起こすための方策である。時間を十分にとって、できるだけ多くのものをリストアップさせた。この時、あらかじめ配付したワークシートに(3)(4)の課題が書かれていることから、受講生はリストアップする際に(3)(4)まで先回りして、「ぬすめる／ぬすめないもの」「うばえる／うばえないもの」を考えながら作業している様子が見えるが、それについては、黙認しておいた。リストアップができた頃を見計らって、このリストアップが言語研究のためのデータ集めに当たることを説明した。

## 2-3. データ分類

続いて、集めたデータについて分類する段階に入る。分類の方法を示したのが(3)、実際の分類を指示したものが(4)である。どのようなものでも「ぬすむ」ことも「うばう」こともできるのかという疑問である。どのようなものでも「ぬすむ」「うばう」ことが可能であるとすれば、「ぬすむ」「うばう」の意味の違いは、先のA・Bという違いであると結論づけられる。もし、「ぬすむ」ことしかできないもの、「うばう」ことしかできないものがあるとすれば、A・Bだけではない別の意味を持っていることが考えられる。それを検証するのである。(3)はそのための確認方法を尋ねている。「これは、確かにぬすめる／うばえる」「これは、ぬすめない／うばえない」と判定するためには、どうするかという問いである。中には、「実際にぬすんでみる／うばってみる」などと、とぼけたことを口にする受講生もいるが、(1)で確認したように、例文を証拠とすることで、「〇〇をぬすむ／うばう」といった場合に自然であるか、不自然であるかによって判定するという判定方法を教室全体で再確認した。

判定方法を確認した後、集めたデータの分類に取りかかる。まず、受講生に「I〔ぬすむこともできるし、うばうこともできるもの〕」を一つずつ出させる。出された

ものについて、「〇〇をぬすむ／うばう」と声に出して確認する。確認できたものを板書する。ある程度数が出たところで、「II〔うばうことはできるが、ぬすむことはできないもの〕」、「III〔ぬすむことはできるが、うばうことはできないもの〕」の順に続けた。

## 2-4. データ分析と考察

板書で明らかになったように、対象物はI〔ぬすむことも、うばうこともできるもの〕・II〔うばうことはできるが、ぬすむことはできないもの〕・III〔ぬすむことはできるが、うばうことはできないもの〕の三つに分けられる。このことは、単に「人目に付かないように」行う行為か、「無理矢理・力づくで」行う行為の違いだけでは説明できないことを示している。受講生に、このことを確認した上で、(5)に示した分析に移り、II・IIIに分類される対象物にはどのような特徴があるか、IIの対象物に共通する性質、IIIの対象物に共通する性質を考える時間を取った。

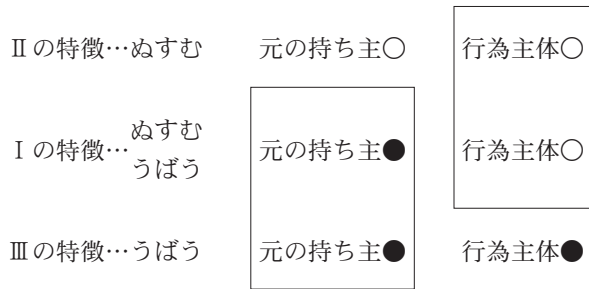
この課題はかなり難しいが、個人で考えるだけでなく、隣同士で話し合ううちに、「コピー」などという声があがる。「A子の（アイディア／化粧方法）をぬすむ」の場合、ぬすまれたA子は、アイディア・化粧方法を失うのかというと、決してそんなことはない。コピーされるだけで、持ち主は依然としてその対象物を保持している。つまり、III〔ぬすむことはできるが、うばうことはできないもの〕に分類される対象物は、「ぬすむ」という行為が実現した後も、元の持ち主が保持し続ける（喪失しない）という性質を持っていることが理解される。これに対して、IIIに分類される対象物は、「A子の（自由／権利／体力／気力）をうばう」のように、「うばう」という行為が実現すると、A子は、自由・権利・体力・気力を喪失してしまうことになる。「心」の場合は、残されているように見えるが、「すっかり心をうばわれた」というような場合の「心」は、「平常心・正常な判断力」のことであり、「平常心・正常な判断力」が失われたことを表すと説明される。I〔ぬすむことも、うばうこともできるもの〕に分類される対象物の場合には、「A子の（お金／宝石）を（ぬすむ／うばう）」のように、A子は、お金・宝石を喪失していることが分かる。

以上は、「ぬすむ」「うばう」という行為が実現した後の、元の持ち主に注目した分析であるが、「ぬすむ」「うばう」の行為主体に注目すると、どうであろうか。IIIの場合には、「ぬすむ」という行為が実現することによって、行為主体はアイディアや化粧方法などの対象物を手に入る。Iの場合にも、「ぬすむ」「うばう」という行為の実現後、行為主体は、お金や宝石などの対象物を手に入る。ところが、IIの場合には、A子の自由・権利・体力などをうばっても、「これがA子の（自由／権利／体



力) だよ」などといって、それを自分の物として利用することはできない。つまり、「うばう」という行為が実現しても、行為主体は、平和や権利などの対象物を手に入れることはないのである。

以上をまとめると次のようになる (○は対象物保持・入手, ●は対象物喪失・非入手を表す)。



これによれば、「ぬすむ」ことのできる対象物は、I・IIで「行為主体が入手する」ものであり、「うばう」ことのできる対象物は、I・IIIで「元の持ち主が喪失する」ものであることがわかる。まとめると、「ぬすむ」は、「他人の所有物・付属物を自分の物とする」という特徴があり、「うばう」は、「他人の所有物・付属物を喪失させる」という特徴があることになる。「ピッチャーのモーションをぬすんで盗塁した」という場合は、モーションを行為主体のものとして、うまく利用したという意味を表す。「A 子のお金をぬすんだ」の場合には、「A 子のお金を〈こっそり〉自分のものにした」という意味となり、「A 子のお金をうばった」という場合には、「A 子のお金を〈無理矢理〉喪失させた」という意味であると解釈される。

最後に、言語直感とこれまでの分析で明らかになったことをもとに、受講生それぞれが自分の国語辞書に「ぬすむ」「うばう」の意味を記述するとしたら、どのように書くかを考えまとめて、モデル授業を終えた。

## 2-5. 受講生の反応

「ぬすむ」「うばう」を取り上げたモデル授業は、次のような目的を持って行ったものである。一つ目に、類義語の典型的な分析方法について学ばせることである。ワークシートに基づいて示すと次のようになる。(1)自分の言語直感によって、意味の違いを考えること。(2)できるだけ多くのデータを集めること。(3)(4)集めたデータを分類すること。(5)分類したデータについて分析し、まとめること。場合によっては、言語直感をもとにして、それぞれの意味の違いを考えたら、現行の国語辞書などの意味記述を調査するといった活動を取り入れることも有効である (今回の授業では時間の関係から、国語辞書の調査活動は行わなかった)。二つ目には、どのように学習者中心の授業にするかということである。そのために、

学習者の集めたデータがそのまま分析対象となるように工夫すること。教室全体で、分析方法を確認し共有した上で、分類・分析し、学習者が意味の特徴を発見できるように、ワークシートや、板書のしかたを工夫することが大切であることを示した。ただし、これらについて「学習者の集めたデータがそのまま分析対象となるように工夫することが大切なんだよ」などと口にすることはしなかった。

担当する類義語を分析し、模擬授業を行う上で、このモデル授業が役立ったか、役立ったとすれば、どのような点で役立ったかを、授業後のアンケートで尋ねたところ、受講生から次のような感想が寄せられた。

○模擬授業を見て、類義語の意味を分析するためには、例文を出して、盗むしか使えない文、奪うしか使えない文を比べることによって、意味の違いが見えてくることが分かった。言葉の意味の違いを分別させるためにはどういう風にすれば良いのかが分かったので、自分の模擬授業を組み立てる上で役立った。

(F・H)

○基本的な授業の組み立て方 (意見の汲み取り方や進行の仕方) だけでなく、どのように分析すべきかということについて非常に参考になった。

研究の方法において、四つの段階に分けていたのが印象的だった。「①言語直感から考える→②「盗む」「奪う」ものを考えあわせる→③分析の方法を考える→④分析と考察」という流れを作り、段階的に思考を深めていくことで、さまざまな観点から物事を考えられるのだと分かった。(中略) また、表を作り、丁寧に一つずつ検証していくプロセスが大切だということも分かった。(T・T)

このように、受講生は、モデル授業を通して類義語の典型的な分析方法を学ぶことができたようである。学習者を中心にした授業に関しては、次のような感想が見られる。

○自分の模擬授業を計画する上で、どのような方向性で考えればよいか、どのような授業展開をすべきかを示していただいたと考えている。(中略) 授業者がすべてを教えるのではなく、児童・生徒が主体となる授業展開をすべきであると感じた。しかし、これは、授業者の実力が試される授業であり、授業者自身が授業内容を完璧に理解していなければ成立しない授業である。「ぬすむ」「うばう」の授業は、それを考える上で有用であった。(K・T)

○授業を受ける側に対してどのように「違い」を気付かせるか、どのようにその「違い」を引き出すかが重要なのであり、独りよがり一から十まで説明しても納得させられるものではない。最後のまとめの説明を聞いて腑に落ちるようなものでなくてはなら

ないのだ。…模擬授業を見て、相手に考えさせるやり方、その言葉が使えるときと使えないときとのニュアンスや状況の違いを考えさせる手法は、納得のいくものであり指針となるものであった。(H・R)

これらの感想は、学習者として「ぬすむ」「うばう」の意味の違いについて、主体的に取り組み、考えたという体験に基づいているのだと捉えられる。一度や二度の体験で、学習者中心の授業ができるようになるものではないだろうが、このような体験を経て、学習者中心の授業に対するイメージを持つことは重要なことであろう。

### 3. 事前指導

モデル授業で、典型的な類義語分析の方法を示したが、受講生が担当する類義語を分析する場合には、どのようなデータを収集すれば良いのか、また、データは収集したものの、どのような観点から分類・分析すれば良いのかなどと、分析に行き詰まることが多い。あるいは、行き詰まりを打開しようと国語辞典を参考にするが、細かく記された意味記述の迷路の中で途方に暮れてしまう場合がある。事前指導では、そのような行き詰まった発表担当者に対するアドバイスを行った。

事前指導の基本的な流れは、次のようなものである。まず、担当者が考えている類義語それぞれの意味について聞く。次に、そのように考えた理由を、具体的な例文を基にして説明してもらう。その後で、こちらから、別の例文を出して、そこに用いられた言葉は、どのように説明できるのかを尋ねる。先に考えていた類義語それぞれの意味を用いて説明できれば合格であるが、説明できない場合には、再度考え直すことを求める。また、求めに応じて、模擬授業についてのアドバイスも行う。

例えば、「うるさい」「やかましい」を担当した受講生は、「A 君がギャーギャーわめいているのが、(うるさい／やかましい)」という例文から、「うるさい」「やかましい」に共通する「大きな音に対して抱く不快な感情」という意味を見出したが、違いを見つけられないでいた。そこで、「蚊の羽音で眠れない」のは「うるさい／やかましい」のどちらか、「A 君と B 君のひそひそ声」「突然の爆発音」「一晩中続く道路工事の音」は「うるさい／やかましい」のどちらかを尋ね、音の大きさによって使い方に違いがあるか、大きな音でも、一回だけの音と連続する音では違いがあるかを考えさせた。また、「A 君がしょっちゅう視線を向けるのが、(うるさい／やかましい)」「前髪が目垂れてくるのが、(うるさい／やかましい)」という例文を提示して、音以外のものに使用できるかどうかについても考えさせた。さらに、「ゴミの出し方について、隣が(うるさく／やかましく)言う」と「ゴミの出し方について、隣の目が(うるさい／やかましい)」

の二つを比べて、どのような違いがあるかについて考えることをアドバイスした。

この受講生は、事前指導について「自分一人ではたどり着けないような意味や例文、その言葉が使われる状況を考え出すことができました。そして、自分の中でまとまっていなかった言葉の意味をまとめることができました。模擬授業の内容は、ほとんど事前指導で先生と話した内容でした。事前指導では、会話の中でその意味を見出していくので、どの言葉から連想されてその意味にたどり着いたのか考えることができました」(K・Y)という感想を述べている。

「しくしく」「さめざめ」「めそめそ」を担当した受講生は、三語とも泣く様子を表しており、「しくしく」は「声を出して泣いているさま」、「さめざめ」は「声を出さないで泣いているさま」、「めそめそ」は「弱々しいさま」という意味であると考えてきた。そこで、「めそめそ」が「弱々しいさま」であるとするならば、「しくしく」「さめざめ」は「弱々しい」という様子は表さないのかと尋ねた。また、「大学生が(しくしく／さめざめ／めそめそ)泣いた」「幼児が(しくしく／さめざめ／めそめそ)泣いた」、「歯が痛くて(しくしく／さめざめ／めそめそ)泣いた」「彼との別れが辛くて(しくしく／さめざめ／めそめそ)泣いた」のような例文を出して、泣く主体には違いがないか、肉体的な苦痛・心理的な苦痛といった原因によって、その使い方に違いはないかを考えさせた。さらに、「しくしくーする／さめざめーする／めそめそーする」のような言い方ができるか。できるとすれば、その場合の意味をどう捉えるか、例文を作って考えるようにアドバイスした。

この受講生は、事前指導について「自分だけで考えるのではなく、他の人(特に自分より言葉に知識のある先生)と考えることで、解釈に幅ができた。たとえば、私は最初、言葉の意味ばかりに注目を置いていたが、先生と話すことによって、文法や対象にも注目するようになった。また、自分の意見を人に話し、アドバイスをもらうことで、考えた意見に自信を持つことができた」(K・H)と述べている。

この他の感想には次のようなものがあり、担当する類義語の分析や模擬授業を構想する上で、事前指導が重要な位置を占めていたことが分かる。

- 事前指導を受けることは、自分には抜け落ちていた視点や考えを補い、捉え間違っていたことを正し、補強するために事前指導は必要だった。(H・R)
- 事前指導で質問されると、分からないことがあったり、新たな疑問が生まれたり、自分にとって何が足りないのか、残りの準備期間に何をすべきなのかが分かり、有意義であった。模擬授業の進め方についてのアドバイスで、模擬授業に見通しができ、や

る気が出た。正解ではなくて、助言がもらえたので、自分自身の勉強にもなったし、新たなことを考えるきっかけになった。(U・Y)

○事前指導がなければ、辞書の意味に縛られて、類義語それぞれの意味づけもできず、違いも見つけられなかったと思う。また、事前指導で、自分が先生にされた質問を参考にすることで模擬授業の発問を考えられたので、模擬授業の準備段階でも、模擬授業を進める上でも役に立った。(I・M)

#### 4. 模擬授業の実際

原則として二語・三語の類義語を一人で担当し、約20分の模擬授業を行った。類義語の意味についての一方的な研究発表ではなく、教室全体での議論を目指した模擬授業が展開された。配付されたワークシートは、いずれも工夫が凝らされたものであった。例えば、第一回目の「つなぐ」「むすぶ」「くくる」を担当した受講生が配付したワークシートは次のようなものである。

《「むすぶ」「つなぐ」「くくる」の模擬授業に配布されたワークシート》(実際は縦書き)

「つなぐ」「むすぶ」「くくる」について考えよう	
☆点を「むすぶ」	「つなぐ」
・	・
・	・
☆「むすぶ」と「つなぐ」を比べてみよう	
・絵を描いてみよう	
①犬を「むすぶ」	犬を「つなぐ」
	
②手を「むすぶ」	手を「つなぐ」
	
・意味を考えて文章にしてみよう	
①その日二人は「むすばれた」	その日二人は「つながれた」
	
②ことばを「むすぶ」	ことばを「つなぐ」
	
☆「くくる」について考えよう	
・意味を考えよう	
①ひもでくくる	
②たかをくくる	
③腹をくくる	

授業は、ワークシートに従って展開された。冒頭に「☆点を「むすぶ」「つなぐ」「くくる」とあるのは、「二つの点を線で(むすび／つなぎ／くくり)ましよう」と指示したものである。ワークシートに絵を描かせるとともに、学習者を指名して黒板にも同じような絵を描かせ、どうして絵が違うのかを問いかけた。絵の違いは、言葉の意味の違いを反映していることを確認して、「意味の違いを考える」という目標を定めた。まず、「むすぶ」「つなぐ」の意味を比較し、最後に「くくる」の意味を考えるという流れである。

ワークシートには「犬を「むすぶ」「犬を「つなぐ」とあるだけで、「何に」がなかったために、また、「手を

「むすぶ」「手を「つなぐ」についても、「何と何が」がないために、どのような絵を描けば良いのか混乱したが、絵を描かせるという工夫は評価できる。犬のぬいぐるみを持ち出して、実際に何かにむすばせたり、つなげせたりするとか、二・三人を前に出させて、手をつなげせたり、むすばせたりする方法もあったであろう。

続いて「その日二人は「むすばれた」「その日二人は「つながれた」」、「ことばを「むすぶ」「ことばを「つなぐ」の意味を文章にまとめるという課題を与えている。ここから、「むすぶ」「つなぐ」の基本的な意味を導き出させようとしたのであるが、担当者の思うような答えは学習者から出されず、結局、担当者が説明することになって



しまった。また、「くくる」についても、「ひもでくくる」のような例文とともに、「たかをくくる」「腹をくくる」のような慣用表現を出して「くくる」の基本的な意味を導き出そうとしたが、果たせなかった。「ことばを（むすぶ／つなぐ）」「たかをくくる」「腹をくくる」のような抽象的・慣用的な表現を用いて意味分析することが難しかったのであろう。まずは具体物を対象とした例文（データ）から分析し、基本的な意味を導き出し、それから抽象的・慣用的な表現の意味へと考えを広げていくべきであった。

各語の基本的な意味をまとめる段階で、担当者からの説明に終わったことが残念ではあったが、絵を描かせるという工夫は、わかりやすいという印象を与えたようで、後の担当者も絵を描かせるという活動を積極的に取り入れている。「さえぎる」「さまたげる」「おさえる」を考えた模擬授業では、ストローを細かく裁断したもので水の流れを作り、それを学習者にさえぎらせたり、さまたげさせたりするという活動を行った。「つるつる」「すべすべ」の回では、毛布やズボンなどを持参し、学習者に触れさせる活動を行った。また、具体的な例文をできるだけ多く出して分析する必要性を感じたのであろう、後に行われた模擬授業では、分析する語を用いた例文を作るという活動を取り入れるものが多く見られた。ただ、担当者が予想しないような例文が出されたことによって、授業がストップしてしまうこともあった。

自分の行った模擬授業で工夫した点と反省すべき点について、受講生は次のように述べている。

○〔工夫した点〕1回目の授業では、できるだけ具体物（ビーズ、毛布、ズボン、コップなど）を持参し、イメージがつかみやすいようにした。2回目の授業では、学習者にできるだけ例文を出してもらい、そこから考えることにした。

〔反省点〕一つ目は、上記のように具体物を持参したものの、それら以外の「つるつる」「すべすべ」について考える余地がなかったことだ。その結果、学習者も自分も納得してその言葉の使い方を学ぶことができなかった。二つ目は、学習者から出してもらった意見を、黒板にうまくまとめることができなかったということだ。しかし、これに関しては、授業をする中で学習者と一緒にまとめていけばよいのではないかと考えた。今回の模擬授業では、2回とも十分に自分自身の意見がまとめられない中で授業をしてしまった。自分の意見をはっきり持った上で、学習者の意見を聞けば、間違いを指摘することができ、自分も学習者も納得するようなまとめができるのではないと思う。（K・H）

○〔工夫した点〕2回目に行った「みだりに」「むやみに」「やたらに」の授業では、1回目の反省を活かし、

実際の看板を撮影して資料とし、身近な例文をできるだけ多く提示するように工夫した。

〔反省点〕まだ完全に理解せず授業を行ったので、想定外の意見が出たときの説明の仕方や、自分の考えを伝える力が足りないと思った。もっと例文を考えたり、その語について調べたほうがスムーズに自分のやりたいような授業ができたと思う。また、完全に理解できていたら、多くの意見が出たときに、「それ違う」などと言えて、授業が変な方向に逸れることはないと思った。留学生に対する支援があまりできていなかったことも反省点だ。留学生用のワークシートを作ったり、授業の合間での声かけを行ったりすべきであった。（F・A）

学習者から発せられる想定外の意見や、例文に対して、自分の研究不足から適切に対応し、説明できなかったことを反省点としてあげている。

学習者からの意見の取り扱い方について述べたものには、次のような感想があった。

○〔工夫した点〕受講生から出た意見はなるべく否定しないように意識した。よく意見が出、いろいろな考えが出るクラスなので、一つ一つの意見を大事にしたいと思った。明らかに違う場合は正し、考えの手立ては提示するが、受講生から活発に意見が出て、よく考えることができたと感じる。まとめの際には、イメージしやすく、違いが明確になるようにと、表にまとめた。意味が分かりにくかったり、出た意見に対して、あまりピンと来ていない際には、例文を提示して分かりやすくなるよう心がけた。

〔反省点〕授業終了時に、まとめのプリントとして完成形のワークシートを配布したが、その内容をもっと深められたらよかった。「光るもの」「輝くもの」を挙げる場面では、自分が思っていたよりも意見が出て、ワークシートにもっと書いておくべきだったと感じた。意見を発表してもらったときに、たくさん意見が出るので、受講生に任せすぎてしまったように感じた。もっと授業者も発言できたらよかった。出た意見を認めるだけではなくて、それを活かして発問したり、意見を深められるような発問をしたりするなどができたらよかった。（U・Y）

学習者主体の授業という点、学習者任せの、行き当たりばったりの授業になってしまいがちである。そのような授業では、授業者は何の役割も果たしておらず、何も教育していない。何を学ばせるのかを明確に持ち、学習者から出される意見を整理し、重要な意見を見分けて、さらに考えを深められるような適切な問いかけを行うなど、授業者の果たすべき役割に触れた感想である。

## 5. 事後アンケートに見る受講生の感想

15回にわたる個別演習（模擬授業）を終えて、「国語学特論Ⅰ」を受講しての感想を求めた。受講生からは次のようなコメントが寄せられた。

○模擬授業を行って：教授の話聞く講義は多いが、この講義では人を前にして話す機会があり、実習や現場に出て授業をする練習になった。どのようなヒントを出し、支援をすれば分かりやすいかということを考えることができた。また、教壇に立って、どのような言葉を使えば伝えたいことが伝えられるかを考えた。自分の声をよく聞きながら話すように気をつけることができた。

模擬授業を受けて：他の学生の模擬授業に参加し、たくさんのアイデアや、授業の工夫を見ることができた。参考にしたいものを見つかったり、「自分だったらこうするだろう」といったことを考えたりすることはおもしろかった。模擬授業の内容に関して、言語直感というのは不思議なもので、同じ感覚のものもあれば、そうでないものもあった。地域性や生活環境の違い、時代などによって言語感覚は変わるのかもしれない。私達は、日々類義語をそれとなく使い分けているが、類義語の使い分けを言葉で説明することは大変重要であると感じた。(M・M)

○教材研究の重要性を感じた。教材研究をすることで、自分の理解も深まる。また、枠にとらわれず、自由な授業を展開することができたのがおもしろかったし、人それぞれ授業の進め方も異なっているのもおもしろかった。それは、その人の性格であったり、テーマとなる言葉によって、授業の進め方も変わってくるのだと感じた。このことは、どのような授業を行うにしても同じであり、それぞれの分野にあった、分かりやすい授業の進め方や資料の作り方があるのだと思う。そのことを学べたので、今後も活かしていきたいと思う。

また、どのような意見が出てくるか分からない中で授業を行う経験は、実習でも今後の教育現場でも役立つことであると思った。そのような相手にどう対応していくのか。どのような展開になるかわからないからこそ、教員側はどのような準備が必要なのかを知ることができた。(F・A)

○受講生がとても活発で、よく意見が出るので、多くの意見が出たときに、それを整理してまとめるにはどのようにしたらよいかということや、出た意見を深めるにはどうしたらよいかについて考えることができた。意見が出て、またそれに対して意見が出て、話し合いや考えが深まっていったので、自由な話し合いの場の重要性を感じた。これから教育実習や将来教育現場で話し合いを大事にしたいと感じた

し、この授業での経験を活かして、よい話し合いができるのではないかと思った。

授業や類義語について調べるといった活動を通して、いろいろな視点から考えることや、様々な情報から選択することの大切さを学んだ。事前指導や授業のときに、その考え方は思いつかなかったと感じることがあったし、「そういう考え方もあるのか」とおもしろさを感じたりした。いろいろな視点で考えることを身につけたので、これから授業を計画する際には、児童・生徒の考えや意見がより多く出るような授業を考えたり、自分の考えを深めたりできるようになると感じる。(U・Y)

## むすび

いずれの受講生も、担当する類義語の意味分析に苦勞し、模擬授業の進め方に戸惑いつつも、取り上げられる類義語の使い分けや、意味記述に興味を持ち、積極的に意見を出し合って、使い分けの理由を追求する姿が見られた。従来の演習発表形式の授業では、発表後の質疑応答を充実させるために、しっかりと発表を聞くことが重要であると、何度となく注意喚起してきた。それでも教室全体を巻き込んで議論が沸騰することなど、ついぞ見られなかった光景であった。しかし、この度の模擬授業では、担当者をよそに、受講生同士で議論し始めるという場面が何度となく現れたのである。中には、議論すべき論点がズレてしまったこともあったが、このような活発な議論を呼び起こし得たことは、学習者に発見を促す、学習者中心の学習指導を目指した本授業の成果の一つとして特記できるであろう。今後は、議論が沸騰した場合に、それらの意見を整理し、論点のズレを修正し、解決に向けて方向付けることができるような力を身につけさせることが求められよう。

また、模擬授業担当者で行った事前指導は、類義語の意味分析に対する助言や、授業構想、ワークシートの作り方、板書計画、発問計画に対するアドバイスによって、担当者の言葉に対する思考力を鍛え、模擬授業の質を保つことに機能したと考えられる。またそれだけでなく、意味分析に関する会話を中心としながらも、時として学生生活などについても話題が及び、学生との緊密な人間関係を構築する上で有効に活用することができた。このような副産物を得たことも、大きな収穫であった。

「国語学特論Ⅰ」の後、3年次前期の「文学・語学総合演習Ⅰ」では、小・中学校で使用される国語教科書から、国語の特質に関するコラム教材を取り上げて、受講生による模擬授業を中心に授業を進める予定である。本授業で学んだ「学習者中心の学習指導」「学習者に発見を促す学習指導」が、受講生による模擬授業にどのように現れるかを期待したい。